



凡庸な無自覚

《今後も俺は、ヘッドフォンで音楽を聴きながら、心地好く首を振ったりすることができるのだろうか。女子便所に忍び込んで、誰かわからない女子の放尿部位を下からこっそり覗き見するという俺の妄想は、今後も生き活きとしたものであり続けるだろうか。ああ、体育館の靴箱の前で、（俺の全く好みではなかったが）俺のことを好いているであろうあの女子が、俺と話しながらまごついていて、一年くらい前のあの様子、あの中に居る俺自身の姿に、妙な懐かしさに似た感情を抱いてしまうのは何故だろう。》 細田貴宏は何処を見るでもなく、何に注意を傾けるわけでもなく、ただ小便器とほぼ垂直に当たるように尿を流しながら、頭の中でカタチを持たない、[考え]とも[思い]とも似つかない、そんな何もかを無為に掻き回していた。たとえるならそれは、煙が換気扇に吸われる前に、抵抗するでもなく怠慢に漂うようなものだった。今の彼にとって、不良気取りの友人がした、「煙草が塩の味がする。」という発言や、前に読んだ小説のなかで彼の記憶に異様にこびりついていた、「お前の体を全身舐めまわしたいんだが・・・」という台詞などといったものは、既に取りに足りないものとなっていた。眼前に在ると思い込んでいる事の複雑さに陶醉し、他の全ての事象が単純に映った。けれども、何よりシンプルなのは彼自身の思考回路であり、想像のなかで好き放題張り巡らせた雑事というものが、彼の年齢特有の、ならではの煩悩であることを自覚するだけの視野は、まだ彼にはそなわっていなかったのである。これまでの彼は、自らの手中におさまっていた、語り手としての意思で何とでも改変が可能な想像上のストーリーを現実を持ち込み、多かれ少なかれそれに引っぱられて日々を送っていた。凡庸な無自覚—これこそがその時分の彼を形容するにあたって、最たる候補に挙がる単語であろうことは、ほぼ間違いがない。

もう少し、事はスムーズに進むはずであった。ある程度手こずるのは十分に予想していたことだったとはいえ、せいぜい彼が友人達とおちゃらけて話した、[緊張して勃起しなかったらどうする]だとか、[早漏だったらどうする]だとかいった程度のものだろうと思っていた。やっと自分にも、一般的に見てそれなりに平均的なタイミングで訪れたこの一大事に対し、可もなく不可もなくさらっと乗り切るだけの知識は、当然の如く有しているつもりであった。しかしざ現実というものに対峙してみると、未知なる部位の存在ばかりに囚われるがあまり、そこを司る女性という大聖堂の構造にまで目を向けることも手足を伸ばすことも出来なかった。それはまるで、空洞の中に吸い込まれたまま酸素を抜かれていったときにおとずれるような圧迫感や無力感であった。または、上下左右から壁が自分に向かって差し迫ってくると同時に、股の間を走り高跳び用のバーが爪先立ちになるくらいまでぐいぐいのぼってくるような抜き差しならなさであった。そういったものに襲撃され、抵抗する気にもなれないような恐怖心が、彼に植え付けられたのである。

『はじめまして。自分は高校生の男です。僕の悩みはエッチが気持ちよく感じないことです。挿入して動いていても、いつになっても射精感がおとずれません。エッチでイクことができません。やはりおかしいのでしょうか？』

幼少時代、近所に住む一つ年上の、短パンを履いた少女にいつも追かけまわされていた不条理な体験も相俟ってか、彼のちょっとした女性不信は、筆下ろしという[冰山の一角]に足を踏み入れるだけの勇気を阻むのに、十分なものであった。

そんな、人生において誰しものが通り掛かるであろう、一つの転換期にまつわる瑣末な一シーンを、これまでどおり思うように飾ることが出来ず、自分が初めて付き合うことになった彼女との関係にも若干の翳りが見え隠れし、何とも言葉せぬ居た堪れない思いで一人ひっそりと落ち込みながら、彼は十八回目の夏を迎えようとしていた。

能天気な夏

そして能天気な夏は、誰の「待った」を聞き入れることもなく、なんの躊躇いも不具合も無しに、例年通り明朗快活に訪れた。学校も夏休みに入り、部活動も春に引退して周囲の同学年の生徒達は受験やら就職やらといった、未だ実感のわからない[次]ページをめくるための身構えを整えようと徐々に動きはじめていた頃、貴宏は漁師である父親の手伝いをしようと、泊まりこみで漁船に乗ることにした。彼は一応、大学進学を考えてはいた。父親である良裕も、学生時代医学部受験に三度ほど失敗し、結局漁師を継ぐことにしたという流れもあってか、息子に自分が見果てなかった夢を投影し、せめては進学して大学生を満喫してくれることを望んでいた。しかし貴宏の友人たちは、彼の何を見抜いていたのかはわからないが、大抵次のようなことを言っていた。

「ほっそんは大学行かんと漁師になるんやろ？ええなあ、海とかなんか、夢が大きくて。」

貴宏もまた、特にまんざらでもないといった様子であることを隠すかの如く、はにかんだような微笑を浮かべながら、こう答えた。

「まあ、俺そんなに学者肌とかってわけちゃうからナ。《これでエエワ》みたいな感じで……。ていうか、大学受けても受からなかったら、結局親孝行とかいう名目で、《親父、頼むウツ！》って言うことになるんやろうしナ。」

本心が実のところどちらを望んでいるにせよ、高校に入って以来ここ二年間というもの、ろくに父親の手伝いも出来なかったことを思うと、彼は先のことを見据えて新しいことをはじめる前に、ある意味で[原点]に立ち戻って今出来ることを確かめておきたかった。そうした生来の真面目さをここで彼に起こさせたのは、当然彼がぶち当たっている課題も少なからず関係していた。せめて彼は、自身においてのみ有効な舵取りをすら見失いかけている自分というものをかなぐり捨て、現在の立ち位置を自覚出来るだけの能力くらいは取り戻しておきたかったのである。

《たとえ二週間くらいのもんでも、海原の沖で魚や汗の臭いやら塩っぱい水やらにまみれていれば、何かしら変わるに違いない。》

その希望的観測は幸いなことに、ある程度当たった。二週間の漁船生活のなかで、彼は自分なりの現実（リアリティ）と、現実世界のなかに位置する自らの日常生活における、[バランス感覚]とでもいうべきものを、見事に掴みなおすことに成功した。朝は降り頻る太陽の熱気で目が覚め、昼は魚のピチピチ踊るとき跳ねまわる水滴と彼の汗が、鋭角の陽の光に照らされ閃光のように煌めいているさまを眺めながら、ひたすら漁業に傾倒した。夕暮方には、海面に朧朧と沁み込んで行く巨大な丸い焰が遺してゆく、生暖かく乾いた風と無言の夕凧を全身で満喫した。身体に覚える、その日一日分の疲労感が生む心地好い重さを故意に仰々しく撫でまくりながら、視線だけは西方の一点に向かって眼力を凝らしていると、ふいに口元に煙草を銜えたくもなった。彼は当時まだ、極々稀にする以外、特に喫煙という喫煙はしなかったが、そこでしか味わえないと彼が決めてかかっているその風景の有限性こそが駆り立ててくる突発的な衝動に対し、この上ない快感が込み上げてくるのを抑えきれなかった。夕食にはその日捕獲した魚を、未だに漲っている生命の残り火で以って焼いて食い、漁師たちのささやかな酒盛りに一員として加わることの出来る、自らの特別な身分に酔いしれた。父親と二人、たわいもない思い出話を語らう機会も何度かあった。そんなとき、どす黒く日焼けした皮膚の上に填った幾多の皺の間から、沈みきれずに身籠った若さの残像を垣間見せながら、しあわせそうに笑う親父の顔を見られたことが、何より嬉しかった。

ある夜

ある夜、父親も含め他のほぼ全ての船員が寝静まったであろう時刻に、携帯の電波も通じない、コンビニエンスストアもない、闇と時間だけが自由に流れる波の上に堂々と居座る船の甲板で、彼は仰向けに体を横たえ、船の揺れとただただ一体化していた。珊瑚と天空を群れる星空と、水上を虫のように徘徊しながら映発する月光の垢との、暴力的なまでに静かな共鳴を聴いていた。映画のサウンドトラックに使われていたお気に入りの名曲をふと思い出し、何となく口ずさんでみると、面白いくらい場違いで陳腐な感じがした。彼の心はその一瞬、歯がゆさのような不思議な感覚とともに小さく騒ぎ、体中に鳥肌をつくってから、その後再び穏やかに落ち着いていった。彼は今そこに存在している一時的な非日常の生活が、ゆるやかに日常色を帯びてゆく一連の動きのうちに、それまで彼が表舞台としてきた日常の「普通さ」というものを、あらためて実感した。《非日常には日常色というものを伴うことがあっても、日常にはそもそも色なんてものをいちいち確認させてくれるだけの親切さはない。そのぶっきらぼうさこそが、日常なのだ。俺は多分、色を確認するなんていう考えがこの世に存在していることすら知らなかった。俺が唯一持っていたのは、想像という絵の具の付いた、脆弱で水気も持たない、一本の筆だったというわけだ。そのかすれた線で俺は、日常の物語（ストーリー）を覆いつくそうとしていたのかもしれない。》—こうして彼は、想像というものの偉大さを軽視することを微妙たりとも覚えたことにより、日常に根をはった自分自身の存在の、より甚だしい「ふつうさ」を実感するに至ったわけである。彼は自分が結局のところ、都会育ちであるというところの幻影に、キラキラしないアスファルトや建物の壁の有限な空間に、まんまととり憑かれていたような気がした。《ああ、将来とは、少しでも天秤がかたむいたほうに向かうことが出来れば、それでいいんじゃないか。そうすれば、波と同化して漂流するように、思うがままに生きる姿に近づけるんじゃないか。そうして自分に似合うところに行き着くかもしれないし、その道筋で何かいいものに出会えることがあるかもしれない。それこそがきっと、自由ってもんだ。》 両親から譲り受けた持ち前の大らかさとプラス思考によって、今彼が祭り上げた健気な悟りは、陶醉好きの想像大工として更なる一步を踏み込ませる勇気を彼に与えた。痛みを伴わずとも心の闇を一掃し、成長できるだけの素地が備わっているという錯覚を、無意識のうちに植え付ける手助けをした。そうして彼はまたしても知っている単語をこねくり回し、その並び方に満悦しながら好き勝手に結論を導き出し、たいそう上機嫌でニコニコしていたわけである。

山さんとエイ

と、そのときであった。目の前に、自分よりもいい気分であるようにみえるほど、不気味なまでにニヤついた中年の男が現れた。痩せ型で、切れ長の目をし、口のまわりにはひよろひよろと無精髭をこしらえ、白いランニングに白いヨレヨレのステテコを履いていて、まさにという感じの風貌であった。夜だというのにその禿げ上がった額を脂でギラつかせながら、少し酔っ払っているのか若干顔は赤らんでいて、太ったやつが汗を拭きながら電車内ですると同じように、鼻息の全てを気持ち良さそうに鳴らしていた。貴宏は最初、暗くてその男が誰であるかすぐには判別できなかったが、そのとき妙に落ち着いていたこともあってか、船上に本物の変質者がいるわけは恐らくないだろうと確信して、特にたじろぐこともなかった。男は、漁師仲間の山さんであった。山さんは貴宏に発言の際を与えることもせず、「よお」と言うこともせず、いきなり現れたことに悪びれる様子すらなかった。相も変わらず、いやらしくニヤニヤした表情を微塵も変えることなく、極めて嬉しそうにこう言った。

「おまえ・・・あのォ、チェリーか？」

船に乗ってはや十日くらいが経ち、漁船生活も終盤を迎えようとしていたわけだが、山さんとは歯磨きのときや小便のときなどに時々一緒になる以外、大して話したこともなかった。酔っ払いのハゲの、この突飛な発言によって、貴宏のそれまでの落ち着きや、男のニヤニヤが彼に持ち込んできたものへの興味と期待は正常に稼動しなくなり、滑稽な空気だけがそこに残った。貴宏はそうした空気が嫌いではなかったが、質問が質問だけあって、自分のなかに仕舞い込んでいた見たくない素性が一瞬頭をよぎってしまい、どう反応していいかわからなくなった。

「えっ、あっ・・・、チェ、チェリーです・・・。」

自身のその発言が、いよいよ彼の変身を完全に解いてしまった。彼が自信満々で身につけていた甲冑は、状況に合わせて硬さを調節できるだけの柔軟性を、まだ兼ね備えてはいなかった。

「じゃあ、やり方とか分からへんのんちゃうか？おっちゃん教えてるか。」

山さんが見た目通りの甲高い声でこう言うと、貴宏はその状況を十分に判別するだけの瞬発的な能力が既に大きく欠如してしまっていることを、辛うじて知ることができた。迷ったらいいのか、逃げ出せばいいのか、堂々としていればいいのか、笑えばいいのか、はたまたこの上なお期待すればいいのか、全く分からないまま、ただ選択肢だけが次々と錯綜し、口からは鯉節のようにポロポロと言葉が剥がれていった。

「いや、あのッ、え、あっ・・・、ちょっ、ちょっ・・・、は、ハあい・・・。」

ここに来て彼は、これまで散々寵愛してきたところの、[単語選]に対する揺るぎない自信すらも、もはや危うくなってきつつあった。山さんの発する高音程の一定性とは裏腹に、貴宏が漏らす一個一個の音の声色は、いちいち上下に上擦っていた。そんなことを全く気にすることはなく、山さんは続けた。

「コレ、なんかわかるか？・・・これエイって言うねんけどな。これなんか、あのォ、背中というかコレ、外側はなんかこう、キレーな鱗・・・鱗というかな、なんかチョットかたい感じになっとな、鱗革・・・〈エイ革〉とか言って、今、巷じゃ流行ってるらしいけどな。じゃあこっち、表・・・あの、お腹のほう見てみ。コレなんか・・・、なんかすごい純白な感じで、若干水色がかってるけど、まあなんかきれいやろ？」

実物のエイをはじめて目の当たりにした貴宏はたいそう感銘を受け、相槌を打つことも忘れて、興味津々でエイの表裏の色や形に見蕩れ、みるみる山さんの説明が織り成すじっとりとした世界へと惹きこまれていった。

「ほら、ここ見てみ。」

そう言って山さんは、その如何わしい指をチョキにする格好で、エイの下腹部の更に下あたりにある、尻尾の付け根あたりに位置する穴らしきものを、慣れたような手つきでピュッと横に開いた。その部分を注意深く覗き込んでみると、其処にはまさに、秘密の花園が嬉々として広がっていた。貴宏はまさかこんなところで、未だ一つのものしか知らない

その秘密に再びお目にかかるようなことがあるとは、思ってもみなかった。暗闇と、デッキを照らしている仄かな灯りの両者が共謀して、山さんの淫猥なチョキの先に走っている真夜中の高速道路（ハイウェイ）が、どこまでもどこまでも続いてゆくように思えてならなかった。オレンジ色の照明が絶えることなく染め上げる一本道を、土曜の夜たった独りで走りぬける物寂しさのような、まるで永劫の彼方へと誘おうとするかのような神秘が、そこには確かにあった。現実が現在（いま）、この瞬間この場所にあり、想像が彼の頭の中で隠れるかのようにこびり付いていたものだとすると、宇宙（コスモ）とは今、間違いなくチョキが指差す方角、いや、すぐその先に毅然として立ちはだかっていた。十日間、男と魚ばかりの世界とかかざらっていた貴宏にとって、この予想外の遭遇は何よりも衝撃的であり、彼が十八年間曲がり形にも培ってきた常識的な判断能力や平衡感覚などといったものはこのとき、ただ無に帰することのみを求めている。陸地を離れてから、彼が意識的にも無意識のうちにも見ないように心がけてきたことが、かえって裏目にてた。まるで病棟に隔離されていたPTSD患者が、何かのはずみでトラウマの根源をもろに見てしまったかのように、[見てはならないもの]の凶暴性は今、解き放たれたのである。そして奇妙なことに、貴宏における[暴走]とは、他でもない彼の下半身、殊に股座（またぐら）に訪れることを選んだのだった。挑発的な鼓動が小刻みに、その膨張した部位を寸分の狂いもなく刺激し、がっちりとその状態で固定した。もはや今の彼には既に抵抗する気もなければその意味や余裕もなくなり、脳からはただ獰猛な混沌状態を誘引させるための指令だけが、絶え間なく送り続けられていた。気づくと彼は、山さんが両手で持ってこちら側を向いているエイ（彼女）の真正面にすっかり仁王立ちし、花園の謎を暴くべく、中へ侵入しようとしていた一。

実にそれは儚く、まるで砂浜に打ち上げられた魚が浅瀬を彷徨う暇もなく息絶えるように、短命であった。彼はオールを失ったボートの如く、いとも簡単に岩礁に乗り上げた。エイ（彼女）が彼を迎え入れた、悦楽の里に横たわるベッドのピチピチいうその感じはまるで、歯のない口に溶かされながら食われてゆくような、優しさと甘美に抱擁されながら一瞬にして脳天を撃ち抜かれるような、直線的な時空の旅であった。《ああ、これだったのか……。こういうことだったのか。これを感じられなかった、俺がわかったのか……。》

後悔と、罪悪感と、歓喜と、渴望

とんでもない過ちを犯してしまったことに対する後悔と自責の念に駆られながらも、あのとき発見した自分自身への歓喜と、たしかに生まれた新しい「何か」、ピチピチいいながら生まれたと思った瞬間に意識が遠のき、二度と触れることができなくなってしまったあの「何か」に対する渴望の気持ちは、依然として彼の心を生け捕りにしたままでいた。彼はそれに近づくことも出来なかったし、かといってそれから逃れることも出来なかった。そんな彼を置いてけぼりにして夏は奔放に過ぎゆき、盆になって家族全員が田舎へ帰省している折に、彼は家に一人残り、夏休みの自由研究としてエイについて調べることにした。といっても、彼にはエイについて生物学的に調べるなどといった野暮な行為は、とてもじゃないが不可能であった。神聖で不可侵なものに対する禁忌を再び犯すことは、彼が掴みかけていた現実（リアリティ）と対極に位置する、想像を有することすらも許されない、破局の世界の給仕人と契約し、永遠にその場所に幽閉されてしまうことを意味しているように彼には思えた。そのことがどれだけ人を魅了するのか—今の彼にはそれがわかり得ず、即興で作りあげた道徳心を盾にして必死に目を背けることで、自らのうちに潜在する可能性を抹殺し、身を守ることに徹していた。だからこそ彼は、エイといっても「エイ革」について調べた。だからこそ彼は、「ふつうの高校生」であることを思い出したかのように、誰も居ない自宅に彼女を呼んだ。エイでの経験を活かして彼女に再びチャレンジすることで、罪の意識から足を洗い、理性の太刀を入れようとしていたのであった。罪の意識はこのときいみじくも、女性に対する恐怖心を拭い去るだけの自信を彼に授けることとなった。一ヵ月半ぶりに交わることとなった彼女の身体は、《ノーマル》という着陸点に無事帰還する彼に安心感を与える安息の場として、また、狂乱したかのように必死に逃げまどう彼の防空壕として抜擢される運びとなった。しかし、彼が女体の髣髴に埋もれようとすればするほど、背後から彼を呼び、手を引く者の存在があった。それは、彼の家にある亀の形をした大きな水槽を悠々と舞うエイであった。人間の女性だけが持ち得る肉身の特別性を貴宏がどれだけ凝視しても、その曲線美が奏でる妖艶さのみを焼き付けてどれだけ目を閉じても、それを嘲笑うかのようにエイがオーバーラップしてくる。彼女の上で男臭い汗と吐息を零す彼に嫉妬することもなく、彼の脳裏を淑やかに横切り、心の大海をヒラヒラと自適に泳ぐエイの姿を貴宏は仰ぎ見た。

とうとう彼は自制がきかなくなった。ピチピチという誘い（いざない）の囁きに真摯に応える以外、もうどうすることもできなくなってしまった。《やっぱり俺は、忘れられなかったよ。俺が勝手に決めていた、現実なんていう有り難いものも、俺が自分に下していた惨めな戒めも、もはや既にどうだっていい。儘よ！》彼女が帰ってしまってから、彼は無言のまま裸ん坊になり、その大きめの水槽のなかへと身を委ねた。そこで再びエイと一体になると、そのまま水中深くズブズブと入ってゆけるように貴宏には思えた。自分とエイが膾を介して「同じもの」となり、そのまま何処か遠くへとスイスイ進んでゆく幻が見えた。そうして彼は、家族が家に居ない間、何度も何度もエイとの淫靡を繰り返したのであった。

エイの少年

それからというもの、彼の生活は神光に照らされているかの如く、確固たる靈驗に護持されていた。エイにたいする彼の愛染を知っているのは彼自身のみであったが、その秘密を打ち明ける・打ち明けないは別として、たとえその事実が露見して他人に冷ややかに蔑まれようとも、堂々として懸命に生きようとする道を、彼はもはや信じて疑わなかった。遣る瀬無さを抱えながらも、ありのままの正直な自分と共に歩くことの美しさを、十八歳の彼はこの時期、少しだけ理解した。それだからか、頑張っただけで彼女とセックスをしたときですら、まるでそのまま自分が潮騒の彼方へ飛び出ていきそうな気持ちになり、無意識のうちに両腕を飛行機の翼のように広げて動いてしまうのであった。そして、遂に訪れた人間の彼女との「フィニッシュ」の瞬間一彼は彼女の瞳のなかを覗き込んでみたところ、そこに映る自分の姿が、雄エイに見えた。

〈了〉